「生活デザインとしての住居学」についての一考察

一東京デザイナーズウィーク 2012 及び第 49 回 KVA 祭に出展した「LIFE DESIGN CUBE」を通して

小川 圭子

本研究は、学生主体で取り組んだ「東京デザイナーズウィーク2012」及び第49回KVA祭に出展した作品「LIFE DESIGN CUBE」とその制作過程をケーススタディとして、学生が「生活デザインとしての住居学」をどのように理解し、与えられた課題をどのように分析し、作品として完成させたかを評価することによって、これまでの教育成果と今後の教育の課題を明らかにしようと試みたものである。

テーマ「HOUSE」に対応する生活の視点からの分析は、「生活のためのデザイン」から「生活(そのもの)のデザイン」へと広がり、デザインの手段は「もののデザイン」だけでなく、「システム」「情報」「組織」のデザインの重要性に対しても認識を広げることができた。しかし表現手段としては、これまで熟練してきている模型表現に偏り、パンフレット、ホームページ、イベント等のデザインが不十分で、生活分析で得られた広範な問題意識を十分に表現することができず、今後に課題を残した。

キーワード: 生活デザイン 住居 ネットワーク構築 ライフスタイル 専門性

1. はじめに(背景)

自分の専門に加えて、その周辺領域に乗り出し、 視野や思考を広げていくことの必要性・重要性が 様々な場で叫ばれている。

平成22年4月に本学に「生活デザイン学科」が 新設された。生活デザイン学科には、衣・食・住・ もの・情報の教員で構成されている。生活デザイン学科1期生は、多岐にわたる専門分野の教員と ともにこれまで、授業や地域連携活動の中で、自 分の専門分野の枠を超えて、様々な取り組みを 行ってきた。これは、以前の学科の領域を超えて 再編・誕生した「生活デザイン学科」が目指して いることの一つである。

2. 目的

本研究は、学生主体で取り組んだ「東京デザイナーズウィーク2012」学校作品展及び第49回KVA祭に出展した展示作品「LIFE DESIGN CUBE」とその制作過程を検討することによって、「生活デザインとしての住居学」を学生がどのように理解し習得することができたかを教育評価の観点から考察する。

3. 方法

「東京デザイナーズウィーク2012」学校作品展及び第49回KVA祭に出展した展示作品「LIFE DESIGN CUBE」の構想から制作・発表の一連の活動を分析する。

具体的には、テーマ「HOUSE」をどのように 理解し、自らの専門分野という枠を超えて、他の 分野へと視野を広げコンセプトを立案し、作品と



図1 出展作品

して構想し、最終的にどのように第三者に向けて プレゼンテーションし、制作意図を伝えることが できたかを確認する。

4. 組織

今回の「LIFE DESIGN CUBE」の構想・制作・展示は、生活デザイン学科の住分野を中心とする全学年の有志で取り組んだ。自分たちの表現したいものに対して、これまで習得した技術や知識、ある程度の専門性を身に付けた3年生が中心になったからこそ、先の見通しを自ら構築することができ、単純作業を1・2年生が、全体的な構成については、4年や教員に助言を受けるという役割分担が確立していった。

また、数は少ないが、住分野以外の分野の学生 も参加している(表1)。

表 1 学生別学生数 (主たる専攻で分類)

学年	3年生	2年生	1年生	4年生	計
計	18	18	1	7	44
内訳	住:17	住:15	住:1	住:7	住:40
	食:0	食:2	食:0		食:2
	衣:0	衣:1	衣:0		衣:1
	もの:1	もの:0	もの:0		もの:1

5. 学生の考える生活デザイン

生活デザイン学科では、これまで、「生活デザイン」とは何かを、授業や多くの課外活動等を通して、学生に伝えてきた。

前回の「東京デザイナーズウィーク」を見学し

た生活デザイン学科3年生数名から、学科としてこのイベントに出展をしたいとの申し出があった。「東京デザイナーズウィーク2012」の出展は、当時3年生である生活デザイン学科1期生が、授業や多くの地域連携活動で学んだ「生活デザイン」を発展させ、その成果を広く社会に周知するための絶好の機会と捉え、生活デザインを形として表現した「LIFE DESIGN CUBE」の制作を通して、「生活をデザインすること」、または「生活するということ」はどういうことなのかを、学生とともに再考した。

6. コンセプト

6-1 東日本大震災から見えたこと

2011年3月11日に東日本大震災が発生した。地震や津波、原発事故…私たちの生活はあの日から一変した。普段の生活で当たり前だと思うことが、一瞬にして当たり前ではなくなった。そこにあったこれまでの「生活」は一瞬にして消えた。

あれから2年が過ぎたが、住宅が再建されても、 未だ元の「生活」には戻っていない。被災地に住 む誰もが、先の見えない不安を抱えている。ただ でさえ競争率の激しい仮設住宅に入居できたとし ても、そこでの期限付きの生活では、安定がしな い。住み慣れた地を離れ、生活してくことになれ ば、「生活」を支えたコミュニティを新しい地で 一から作らなくてはならない。

住まいと収入の見通しが見えなければ、被災者の期待感は上がらない。そして、よりその期待感を抱かせるためには、社会を含むあらゆるコミュニティが必要不可欠である。ここで言うコミュニティとは、家族や親戚、近所の知り合い、学校の友達、職場の仲間はもちろん、店頭販売やSNS(ソーシャル・ネットワーキング・サービス)含む生活サービスの全てを示す。現代の生活は、家族構成も労働形態も多様化が進んでいる。少し前まで家庭内で営まれていたことの多くが、家庭から外部化し、ビジネスとなって生活を支えている。生活サービスが外部化することで、多様なライフスタイルに対応できるようになれば、生活を支えているシステムもまた複雑になる。昨今の生活は、以前よりも個々の生活を支える様々なもの・サー

小川 圭子 3

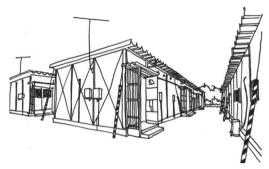


図2 仮設住宅(イメージ図)

ビスと切り離しては成り立たない状態になっている。

私たちは今回の大震災で、単に住宅をデザインするだけでは「生活」が全く機能しないことを実感した。住宅だけではない、社会との様々なつながりの構築が基盤にあってこそ、私たちの「生活」が成り立っていることを思い知らされた。

6-2 生活を支える多くのネットワーク

そこで、生活をデザインすることは何なのかを考えた。個人の周りには様々なネットワークがあり、人はその中で生活を営んでいる。各々のネットワークは、その個人を介して他のネットワークとつながり、関係している。人やモノ、情報媒体、制度等、様々なネットワークを構築することが、「生活」を支える、「生活」自体が豊かになることに直結する。そのネットワークは、以下のようなものが挙げられる。

- 1) 生活を支える人・組織
- 2) 生活を支えるモノ
- 3) 生活を支える制度・ルール (システム)
- 4) 生活を支える情報媒体 等々

これらを構築するためには、「社会的な活動の総合として生活が営まれていること」の理解が必要である。生活デザインとは、人がその時々に、様々な手段で必要な情報を得ながら、生活を支える制度の下、生活のサポートする人や組織の中で情報を発信しながらデザインすることである。今回は、図3の網掛部分で示した、生活を支える人・組織と生活を支えるモノに重点をおき、生活デザインを形として表現した。

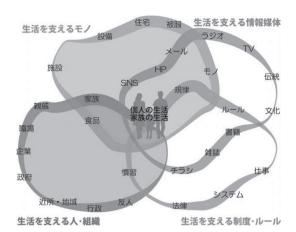


図3 生活のネットワーク

6-3 コンセプト (広義)

「ライフスタイルによって、私たちの空間は変わる その空間を『家』と呼ぶ 私たちはどんな繋がり を持っているのだろう ライフスタイルによって変わる『空間』を繋げ 私たちの生活をみる」

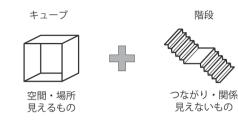
6-4 コンセプトと作品の関係性

建築の模型は、実際に建築するために検討するため、又は、既に存在しているもののミニチュアとして認識させるものであるが、この作品はそういう意図では作られていない。形としての建物を一旦壊し、再構築することで、生活を場面の連続として捉え、そうすることで人のつながり、場所のつながりを強調させている。

モデルとなる登場人物のリアルな生活の一場面をキューブの中に制作し、それらを「階段」でつなげ、生活を表現した。キューブは、空間や場所を表し、「階段」は目には見えないつながりや関係を示しいている。これらすべてをライフスタイルとして取り扱うことは当初の企画段階から変わっていない。作品タイトルもそのような意味で、多くのキューブの集合が大きな生活と捉え、「LIFE DESIGN CUBE」と名付けた。

住宅と生活を支えている施設などの「見えるもの」と人間関係や伝統などの「見えないもの」。 この2つがバランスよくあることで、生活が成り立っている。

昨今の私たちのライフスタイルは、住宅から生活を支える外部の施設に波及し、そのつながりは



空間・場所を示す。

空間と空間のつながり・関係を示す。



ライフスタイル

図4 キューブ・階段の意味するもの

複雑化している。形として見えないが、そこには 確かにあるものがある。

この大枠を元に、展示形態を検討した。

7. 各ライフスタイルの想定

多様化している現代の生活を表現するため、家族 構成での分類はそのイメージで画一的なものになる 恐れがあるため、あえて避けた。まず、現代社会が 抱える様々な問題点や現状を書き出し、そのつなが りを整理した。本来であれば、生活が多様化してい る人々を多く取り上げるべきであったが、わかりやす く伝えるため、ある一例をモデルとして提示し、そ の内容を細かく設定することで、現代社会を踏まえ た、よりリアルな人々の生活を表現することし、生 活を支える「見えるもの」と「見えないもの」を再構 築しながら、現代社会を象徴する人物像として「単 身者」、「シングルマザー」、「高齢者夫婦」の生活 を例に挙げ、それぞれ2組の具体的なライフスタイ ルを想定し、模型で表現をした。







単身者

シングルマザー

高齢者夫婦

図5 想定する人物一覧

想定人物のライフスタイルは以下のように想定 した。

7-1 単身者①

20代男性。サラリーマン(正社員)。一人暮らし、

住居は寝るだけの場所。帰宅はいつも遅く、食事 も中食や外食が多い。

帰宅で起床 → コンビニで朝食購入 → 電車で 通勤 → 会社で仕事 → 上司とラーメン屋で昼食 → 夜遅くまで残業 → 上司と飲み会兼夕食 → 帰 宅の電車 → 自宅でくつろぐ





図6 単身者①の生活

7-2 単身者②

20代女性。派遣社員。女友達とシェアハウスで同居。できる限り自炊を心がけ、家事は友達と協働。

相部屋で起床 → リビングで友達と自炊・朝 食 → 電車で通勤 → 会社で仕事 → 派遣同期とカフェでランチ → 定時に退社→スーパーで夕食の買い物 → 帰宅の電車 → リビングで自炊・夕食 → 寝室でくつろぐ





図7 単身者②の生活

7-3 シングルマザー(1)

30代女性。子供は保育園に通う男児と二人暮ら し。カフェでパートをしており、食事はできるだけ自 炊、極力子供と一緒に食事を摂るようにしている。

母親起床・子供起こす → 朝食を子供に食べさせる・ともに朝食 → 保育園に子供を預ける → カフェでウエイターとして働く → 保育園に子供を迎えに行く → 公園に寄ってママ友とおしゃべり → スーパーで夕食の買い物 → 子供と夕食 → 子供を寝かす → 資格取得の勉強

小川 圭子 5





図8 シングルマザー①の生活

7-4 シングルマザー②

30代女性。小学生男児と二人暮らし。帰宅は遅く、子供はひとりで夕食をとることが多い。

母親起床・子供起こす → 朝食を子供に食べさせる・ともに朝食 → 子供は小学校で勉強 → ディサービスセンターでヘルパーとして働く → 子供は公園で友達と遊ぶ → 遅くまでディサービスセンターで働く → 子供は自宅で一人夕食 → 母親帰宅





図9 シングルマザー②の生活

7-5 高齢者夫婦①

夫婦ともに70代。夫は無職でデイサービスセンターに通っている。足が不自由で車椅子を使うこともある。妻は専業主婦。近くに娘夫婦が住んでいて、遊びに来てくれるのが楽しみの一つ。

夫婦で起床 → 妻が部屋の清掃 → 朝食を作り夫に食べさす → デイサービスセンターに夫を送り出す → デイサービスセンターで友達と楽しむ → 妻が友達とゲートボール → 妻はスーパーで夕食の買い物・友達と立ち話 → 夫が帰宅 → 娘家族が遊びに来る → 夕食をともに食べる・娘家族が帰宅 → 夫婦で就寝





図10 高齢者夫婦①の生活

7-6 高齢者夫婦②

夫婦ともに70代。夫は平日早朝交通安全ボランティアを行っている。妻は専業主婦。玄関・キッチン共有の二世帯住宅で、孫を含む娘家族と同居。娘夫婦は共働きのため、家事のほとんどは妻が担っている。

娘家族と朝食 \rightarrow 妻が洗濯・物干し \rightarrow 夫が地域の子供たちの交通誘導 \rightarrow 夫婦で友達とゲートボール \rightarrow 妻はスーパーで夕食の買い物・友達と立ち話 \rightarrow 夫は公園で犬の散歩 \rightarrow 夕食の準備中に娘家族が帰宅 \rightarrow 夫と孫が入浴 \rightarrow 夫婦で就寝





図11 高齢者夫婦②の生活

8. 制作概要

幅4m奥行2m高さ2.5mの展示スペースに、画用紙を貼ったハニカムボードをT字型に3セット組んだ。そうしてできた3セットのパネルそれぞれに「単身者」、「シングルマザー」、「高齢者夫婦」を割り当て、そのパネル間を人が自由に行き来できるようにした。

パネルには、合計48個のキューブとそれらをつ なぐ45本の階段(折り返し階段は、行き帰りで1 箇所と数える)が貼り付けられており、そのキュー ブのつながりは各登場人物の1日のライフスタイ ルの流れとなっている。各々のストーリーは、パ ネル上部からスタートして下部へ行き、穴を通っ て、裏面の上部へと生活の流れが続いていく。パ ネル上部にあるキューブは住戸内を、下部の方に あるキューブは住宅の外部にある施設等を表し、 それら生活関連施設の背面には、街を表現した絵 が書かれている。また、1日の始まりと終わりの キューブは、そのインテリアをカラーで、その他 のキューブのインテリアはモノクロで表現した。 そうすることで、始まりと終わりを明確にした。 また、パネルに空いている丸穴は、キューブがい ろいろなところでつながる可能性があること、常

に変化し続けていることを意味している。

9. 東京デザイナーズウィークとは

東京デザイナーズウィークは、1986年より開催されており、企業やデザイナー、学生、団体がそれぞれのテーマに合わせクリエイティブやテクノロジーが織り成す作品を展示・発表する、日本最大級のデザインイベントである。主催は、特定非営利活動法人デザインアソシエーション。東京デザイナーズウィーク内では学校作品展やワークショップの他、多くのコンテンツを展開している。

出展するにあたり、2012年の学校作品展の出展ジャンルは、合計で15ジャンルがあったが、本学の出展作品のコンセプトは、複数のジャンルにまたがることから、「ノンジャンル」を選択し、出展した。展示形態は、屋内テントブース展示、屋外展示、コンテナ展示があったが、作品の緻密さや材料、天候等に対応するため、屋内テントブース展示で出展した。

展示構想については、展示スペースの制約や天井貼りの不可等、多くの制約があり、また、作品を制作していく上で、学生が当初描いていたものと変更せざるを得ない部分も多々あった。

また、展示期間中は、他の出展校とくらべると、「LIFE DESIGN CUBE」は、現代の問題を多面的に捉えたコンセプチュアルな作品であったので、何を訴えたいのか、作品だけでは十分に伝えることができず、来場者には一人ひとり口頭で説明をしないと、趣旨が理解しにくいことがあった。

10. 広報

http://www.tdwa.com/ BS日 テレ「TOKYO DESIGNERS WEEK.tv」、イベントブック:14万部、集大成イベントブック:1千部、総来場者数:101,790人。その他、本学ホームページ、本学生活デザイン学科ホームページ等。

11. ワークショップ

東京デザイナーズウィークの学校作品展に出展するにあたり、学生によるワークショップの実施が求められた。生活デザイン学科は、衣食住ものをキーワードとし、それらをトータルで学ぶ学科である。身近な素材である紙を使い、生活を楽し

めるツールとして「ハット(帽子)」をつくるワークショップを実施した。来場者の多くは子供連れで、学生たちが講師を務め、頭の寸法を計って、 予め用意した型紙に合わせ画用紙を切断し、のり等で立体に組み上げていった。



図12 ワークショップの様子

12. 学園祭

一週間後には、第49回KVA祭への展示も控えていたため、「東京デザイナーズウィーク2012」 出展後に、来場者の意見や反省点をもとに、展示物に修正をいれた。



図13 学園祭に展示した写真パネル

〈修正点〉

- 1) T字に組んだ各パネル上部に登場人物を表す タイトルを付した。
- 2)「キューブ」内にしか配置していなかった主

小川 圭子 7

たる人物を「階段」上や始まりの「キューブ」 の上にも配置し、それぞれの登場人物の一連 の流れがよりわかるようにした。

3) 学園祭での展示は、「東京デザイナーズウィーク2012」への出展報告も兼ねていたため、コンセプトパネルの他、制作・展示状況をまとめた写真パネルを作成・展示した。

13. 制作発表活動を通じて

13-1 これまでの後期基礎科目

「生活デザイン」は、しっかりとした軸(専門性)をもっていることを前提とし、さらに専門性を生かすために、その他の周辺領域の知識・技術を身に付けることで、俯瞰して物事を捉え、理解できることを目指している。

それは以前、本学の授業科目として開講されていた「まちづくり演習」に通じるところがある。平成19年から22年開講されていた、これらまちづくり演習は、主に八王子みなみ野シティをフィールドとし、学生に一連のイベント等に受身としてではなく、主体的にコーディネートする立場で参加し、まちづくりに関わることで、その住民に対しては、地域への学生の地域貢献に、学生自身にとっては、大学で学んできたことを実践し、さらに専門を磨くことができるという趣旨で取り組んできた。

まちづくり演習では、各学年での連携も視野に入れていたため、開講学年を全学年としていた。しかし、基礎科目であったことも影響し、実質1・2年生の受講者が多く、学生にとって大学で学んだ専門性を生かして、まちに関わるイベントを成功させることができなかった。

13-2 専門性を生かした生活デザイン

生活デザイン演習で基礎的なことを習得した段階で、新たに生活デザインとして視野を広げ、実践的な課題に対応するには、今回のイベント出展が良い機会であった。3年生以降は専門性を活かす段階に入るが、その一定の成果を発表するという面で今回のイベント出展は、専門的な知識・技術・スキルを踏まえて、改めて生活デザインを考える機会になったのではないか。

14. 結果

14-1 構想過程

東京デザイナーズウィーク2012の学校作品展の では、「HOUSE」「PLAY」の2テーマが示され、 本学は、「HOUSE」を選択し、コンセプト作成に 取り組んだ。制作の過程で、キューブを階段で繋 げるという大まかな構成は、初めから一貫してい る。初めのうちは、キューブの中に表現するもの が、住宅の中の生活の場面だけであった。それが、 現代の日本が抱える様々な社会問題を抽出し、そ れらのつながりを整理する、すなわち「住まうこ と|「生活すること|を掘り下げることで、物事 を捉える視野が広がっていき、キューブの中に職 場や生活を支えているサービス産業等が盛り込ま れていった。同時に、想定するモデルの家族構成 や職業、ライフスタイルを具体的に想定したこと で、現代の社会問題を象徴したよりリアルな生活 を表現することができた。また、キューブとそれ らをつなぐ階段を時間的な流れとリンクすること によって、階段で各々のキューブをつなぐことの 意味付がより強くなった。

当初は、天井からキューブを吊るして、その間を来場者が自由に行き来できる展示形態を想定していたが、今回は、屋内テントブース展示であったため、消防法等の会場管理上の制約される部分が多々あった。また、来場者の過失によって、作品が破損する危険があった。そのため、天井からキューブを吊るすことは断念し、ハニカムボードを丁字型に組み、その壁面にキューブを固定する方法をとることで、作品の間を人が行き来できることは実現させた。

このように、根本的なことをもう一度問い直すこと、または新たな問題を解決することで、その 都度コンセプトに関する考え方やや展示形態その ものが変化していった。住生活について、多くの ことを考え、その現象や意味をよく整理し、深める習得することができた。

14-2 組織力と関連団体との関わり

今回のイベント出展で、一時的参加ではなく、 7ヶ月という一定期間長期にわたり、チーム内は もちろんのこと、外部団体との連携を行うことで、 携わる人々により、その活動は急激にそして、様々な分野に広がっていったことが確かめられた。

15. 結論(反省)

先に述べたように、今回の取り組みを通して、 生活を分析する力を身につけることは、ある程度 達成できた。また、組織についても、しっかりと した役割分担ができていた。これは、様々な専門 分野を習得している学生が、入り混じった生活デ ザイン学科だからこそ、できる体験で、学生にとっ ては、住分野以外の学生も入ることで、新たに得 たものは大きいと感じる。

ただ、噛み砕いたコンセプトを関わる学生全員が共有できていない面が、見受けられた点は、残 念なところである。

また、当初は「生活」の全てを形としてデザインし、表現しようと試みたが、結果的には、3)生活を支える情報媒体、4)生活を支える制度・ルールについては、具現化することができなかった。

ただ今回、他分野の学生が混合したといっても、 やはり中心となったのは、「住」を専門に学ぶ学 生であった。そのため、建築模型制作という特殊 技能を通して模型を使っての極めて建築的な表現 方法に特化した展示形態となったため、どうして も「住」の視点や建築的な表現にならざるを得な くなり、周辺領域全般を表現するには、かなり困 難な部分もあった。また、ビデオ・ネットなどを 活用した展示形態や、パンフレットの作成・配布 も周辺領域を含めたプレゼンテーションするため には、展示期間中に実践する必要があった。ネットやビデオ等の模型以外の伝達手段を作成する知識や技術が伴わず、考えていることを形に表現しきれず、来場者にその意図がきちんと伝達できないという結果となってしまった。また、ただの展示物で終わりでなく、それを活用した来場者参加型、体験型の展示形態にすることも考えられたかもしれない。

今後は、自分の専門に加え、周辺分野につながる様々なプレゼンテーションの技術を習得できる 展開が望まれる。

謝辞

東京デザイナーズウィーク2012への出展は、平成24年度現代生活学セミナーとして実施いたしました。ご協力いただきました多くの方々に心より感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 特定非営利活動法人デザインアソシエーション:東京デザイナーズウィークホームページ. http://www.tdwa.com/ 2012/03/02
- 2) 小川圭子:平成24年度現代生活学セミナー報告リーフレット (2012)
- 3) 小川圭子: 東京デザイナーズウィーク2012 コンセプトフライヤー (2012)
- 4) 野々山久也:家族ライフスタイルの多様化へ の潮流. 都市住宅学6:5-9 (1994)

(受付 2013.3.27 受理 2013.5.23)